

子ども

—自分を写し出す鏡—

小野 敏 幸



「静かにしろ。何回言ったらわかるんだ」

現在の学級の担任になったばかりのころ、私はよく、教室どころか学校中にまでひびきわたるような声で、子どもをしかっていました。はじめのうちは大声を出す度に反省もしました。でも、そのうち慣れてきてしまい、こんな学級を受け持つんだから、少しくらい大きな声でしからなくてはやっていけないさ、とさえ思うようになってしまいました。

そんなある日の出来事です。その日、授業開始のチャイムが鳴り終わっても教室内がざわついていました。日直のK君が、私もびつくりするくらい大きな声で、

「静かにしろ」

と言うのです。たちまちS君が言い返します。

「そんな大きな声で言わなくてもいいじゃないか」

「なんだって」

と再びK君も言い返し、二人はあつという間に大きな声で、言い争いを始めました。

そんな光景を見ていた私は、子どもとはいえみつももないな、と思いましたが、しかし、次の瞬間、がく然としてしまいました。その時私は、K君とS君の中に、まぎれもない自分自身の姿を見出しただけです。

子どもは、担任の人柄を正直に反映するのだなど、その時思いました。担任の言動は、子どもの言動に大きな影響を与えるものであり、子どもの姿は、そのまま担任自身の姿のように思えてなりません。

例えば、教師がだらけていたり、気持ちがいざずんでいて余裕がなかったりする時、子どもは教師の意図したようには動きません。それどころか逆に子どもの言動にふりまわされてしまいがちです。こうなると、必要以上に子どもをなげないひと言が気になったり、いらいらして大声で子どもをしかつてみたりして、ますます子どもの心ははなれていってしまいます。

「道子さん、すぐ帰りますか？ちょっと上がって下さい。見せたい物がありません」

娘を迎えに行った私に笑顔でそう言うなりキミばあちゃん（娘を預かってくれている子守さんで、また私たち夫婦



竹之下 道子

雪うさぎ

こともなく、学級のふんい気はとてよくなるように思います。まさに、子どもは教師自身の鏡なのだという気がします。

人は鏡を見て化粧をしたり、身だしなみを整えたりします。自分もまた、絶えず子どもという鏡を見て、教師としての心の身だしなみを整えていかなければならないと思います。

教職三年目を迎えて、こんなことを考えながら、子どもに接している今日のごころです。

(石川町立中谷第二小学校教諭)

の仲人さん)は、台所の冷蔵庫の戸をボタンと閉めると両手になにか大切そうに乘せて来ました。

それは、白い大きな西洋皿の上にちよこんとすわっている雪うさぎでした。赤い南天の実が、まるで本物のうさぎの目のように愛らしく、南天の葉の二つの耳は、今にも取れそうに見えましたが、鮮やかな緑色は、うさぎの白い体をつくつきり浮き立たせていました。

蛍光灯の光に照らされながら、キラキラ光る雪うさぎは、キミばあちゃんと娘の愛が一緒に作ったもので、午前十時ごろから私の帰りを冷蔵庫の中でずっと待っていたということでした。

時計が、七時をかなりまわっていたので、心からのお礼を言い、娘を



▲愛ちゃんといっしょに……